保育士養成校の実習担当教員と施設職員のインタビューから施設実習の課題の抽出

Extraction of practical training issues from interviews between teachers in charge of practical training and facility staff at a nursery teacher training school

山本　健志郎[1]・居川　寛子[1]
Kenshiro YAMAMOTO・Hiroko IKAWA

Abstract

Collaborative training between training schools and facilities is one of the challenges of practical training in nursery teacher training. In this study,a co-occurrence network was created from text data of interviews with training school teachers and facility staff, and problems were extracted from a text analysis using SCAT. Consequently, three issues were extracted: (1) sharing of learning from practical training instructors at training schools and facilities; (2) establishing tools to eliminate hesitation due to a mutual standpoint; and (3) improvement of the quality of practical training through the use of information and communication technology

１, 研究の目的と背景

保育士養成課程における科目に保育実習がある。保育実習は保育士養成校での学内での学びを現場でより具体的に理解するだけでなく、保育現場そのものを理解する機会にもなる重要な科目である。平成30年に「指定保育士養成施設の指定及び運営の基準について」が改定され、「３ 指定保育士養成施設の所長は、教員のうちから実習指導者を定め、実習に関する全般的な事項を担当させ、当該実習指導者は、他の教員と連携して実習指導を一体的に行うこと。また、実習施設においては、主任保育士又はこれに準ずる者を実習指導者と定めること。」と全国保育士養成協議会が行う実習指導者認定講習を受講した実習指導者の拡充を目指し、保育実習の質の向上が図られている。このように保育の質の改善を行っていく背景には、2022年４月時点で厚生労働省の調査では待機児童数が2944人と前年に比べ2690人減少し、待機児童問題の解消が目前となってきたことがある。待機児童問題の解消の兆しが見え始めた現在では、保育の質の向上が次のテーマとなっている。そのため、今後保育士となる保育士養成課程から質の向上を図り、その中核として保育実習の改善が重要となる。

保育実習の改善については養成校と施設の協働が大きなテーマに挙げられる。全国保育士養成協議会の実習指導者認定講習でも教科書として指定されている「保育実習指導のミニマムスタンダードver２~「協働する保育士養成」~でもサブタイトルに「協働」が取り入れられ、巻頭では「養成校の実習指導者と実習施設が更なる協働を深めることが求められる」としている。保育実習では実習中に養成校教員が施設を訪問し指導するために巡回する巡回指導が１回以上行われるよう定められており、実習の依頼時やこの巡回指導時に施設職員と情報共有を行う等、今までも協働をしてきたことは言うまでもないが、養成校と施設のそれぞれに専門性を持った実習指導者を指定し、さらに協働を深めることを目指している。

しかし、著者自身が保育実習指導に携わっているが、現状として施設職員と実習計画や実習中の指導内容について十分協議できているとは思えない。保育実習Ⅰと保育実習Ⅲでは様々な児童福祉施設

1　作陽短期大学　音楽学科　幼児教育専攻　*Sakuyo Junior College, Department of Music, Major of Childhood Education*

に実習に行くため、教員が一つ一つの施設と綿密な打ち合わせを行うことは非常に困難である。また、施設ごとに価値観や実習の受け止め方も違うため、実習での教育の均等化が難しいのが現状である。

このような現状がある中で保育実習を改善していくためには、まず保育実習に関する課題を抽出することが肝要である。保育実習の協働のためには養成校と施設それぞれの立場からの意見を精査し、互いの意見を尊重した上で今後の保育実習の課題を明確にする必要があるであろう。そのため、本研究の目的を「養成校保育実習担当教員と施設職員の相互のやりとりから協働的な保育実習への課題を明確にする」こととする。

2, 方法

本研究は、養成校保育実習担当教員１名と施設職員１名の保育実習に関する対話式でインタビューを行い、そのテキストデータをKH coderとSCATを参考にテキスト分析をおこなった。

①調査時期：2022年10月

②インタビューの方法：半構造化インタビューの形式で相互の対話は自由に行ってもらい、音声データとして記録した。質問項目は1,「理想の実習生像を教えてください」、2,「保育実習で課題や大切にしないといけないことはありますか」、3,「実習生の評価で困っていることはありますか」の３つの質問を行い、質問に関する回答から自由に会話をしてもらい、その内容をテキストデータとした。

③分析方法：本研究はインタビューを樋口（2018）が開発したKH coder（ver３）を用いて共起ネットワークを作成し、計量テキスト分析を行った。KH coderを用いた理由は主観的な意図が入りやすい質的研究をより客観的に分析することが可能となるからである。また、共起ネットワークは語句の頻度や語句と語句のつながりを色別にグループ化して表現され、視覚的にも分かりやすいグラフで表すことができるため、養成校実習担当教員と施設職員それぞれの実習に関する概念を明確にすることができる。次に大谷（2007）により提唱されたSCATの手法を参考にそれぞれの意見のストーリー・ラインを作成した。協働的な保育実習の課題の明確化をするためには、それぞれの主張や価値観を客観的に捉え比較検討する必要がある。SCATは４ステップのコーディングとそのテーマや構成概念をつなぎストーリー・ラインと理論記述を作成する手法であり、比較的小さな質的データでも有効とされている。

④研究倫理と協力者への配慮：本研究に協力した教員、施設職員、養成校、施設は特定されないように配慮し、事前に参加することにより不利益がないことを説明し、同意のうえでインタビューに応えてもらった。

3, KH coderによる共起ネットワークの結果

【分析の手順】

まず、インタビューデータを文字に起こし、同義で使われている語句を統一した。語句の整理には大学の教員２名で一つ一つ同義で使用されているかを話し合い統一していった。その例をTable１に記す。その後のテキストデータをKH coderを使用し共起ネットワークを作成した。養成校実習担当教員の共起ネットワークをFigure１、施設職員の共起ネットワークをFigure２に表す。

Table１　語句の統一の例

統一後	インタビューデータの語句
利用児	・子どもたち　・子ども　・お子さん　・子ども　・利用者の方 ・障害のある方　・障害の方
プロフィールシート	・これ　・こういう書類　・こういうもの
保育士としてかかわる意識	・意識　・そこ　・心持の意味合い
就職	・その　・それ　・そういうふう　・また戻ってくる　・戻って来られる
質問して	・聞いて　・聞き取って

【養成校教員の共起ネットワークに関する結果】

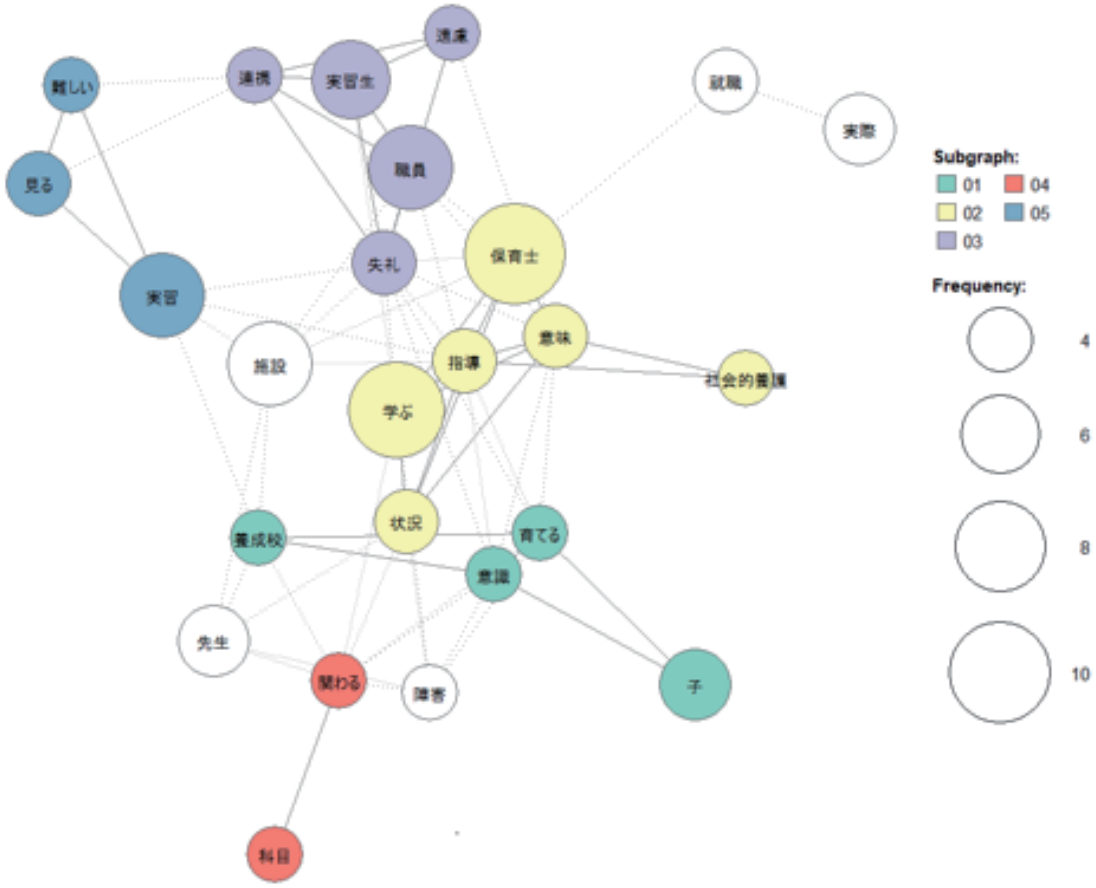

Figure 1 養成校教員の共起ネットワーク

養成校教員の共起ネットワークから５つのグループが検出された。その共起ネットワークでグループ化された語句とその概念と考えられる定義をTable２にまとめる。Subgraph１は「養成校として育てる対象としての学生」、Subgraph２は「施設実習で学んでほしい保育士としての専門性」、Subgraph３は「実習生に関する指導の連携」、Subgraph４は「利用児とのかかわりを学ぶ科目」、Subgraph５は「実習の観察の視点」の概念と定義した。Subgraph１では、「育てる」や「養成校」に加え、学生を「子」と表現しているところから、育てる対象としての意識が強く出ていると解釈した。Subgraph２は「保育士」や「学ぶ」という語句に加え、「指導」、「意味」、「社会的養護」などから施設実習で学んでほしい内容についてのグループだと判断し、それらの学んでほしい内容を保育士の専門性であると判断した。次にSubgraph３について「達成」と言う語句からは実習での目標の達成という意味合いがあり、そのための職員と養成校教員の連携についての概念であると考えられる。そして、Subgraph４は「科目」と「関わる」の２語のみの形成であり、「関わる」と言う語句から実習中に利用児と関わる際に必要な科目であると判断した。最後にSubgraph５は「実習」、「見る」、「難しい」という語句の構成であるが、この「見る」には実習での観察についての概念であることが考えられ、その視点の習得の難しさについての概念であると定義した。

Table２　養成校教員の共起ネットワークのグループの定義		
グループ	語句	概念の定義
Subgraph1	育てる　意識　養成校　子	養成校として育てる対象としての学生
Subgraph2	保育士　学ぶ　指導　意味　状況　社会的養護	施設実習で学んでほしい保育士の専門性
Subgraph3	実習生　連携　達成　職員　失礼	実習生に関する指導の連携
Subgraph4	科目　関わる	利用児とのかかわりを学ぶ科目
Subgraph5	実習　見る　難しい	実習の観察の視点

【施設職員の共起ネットワークの結果】

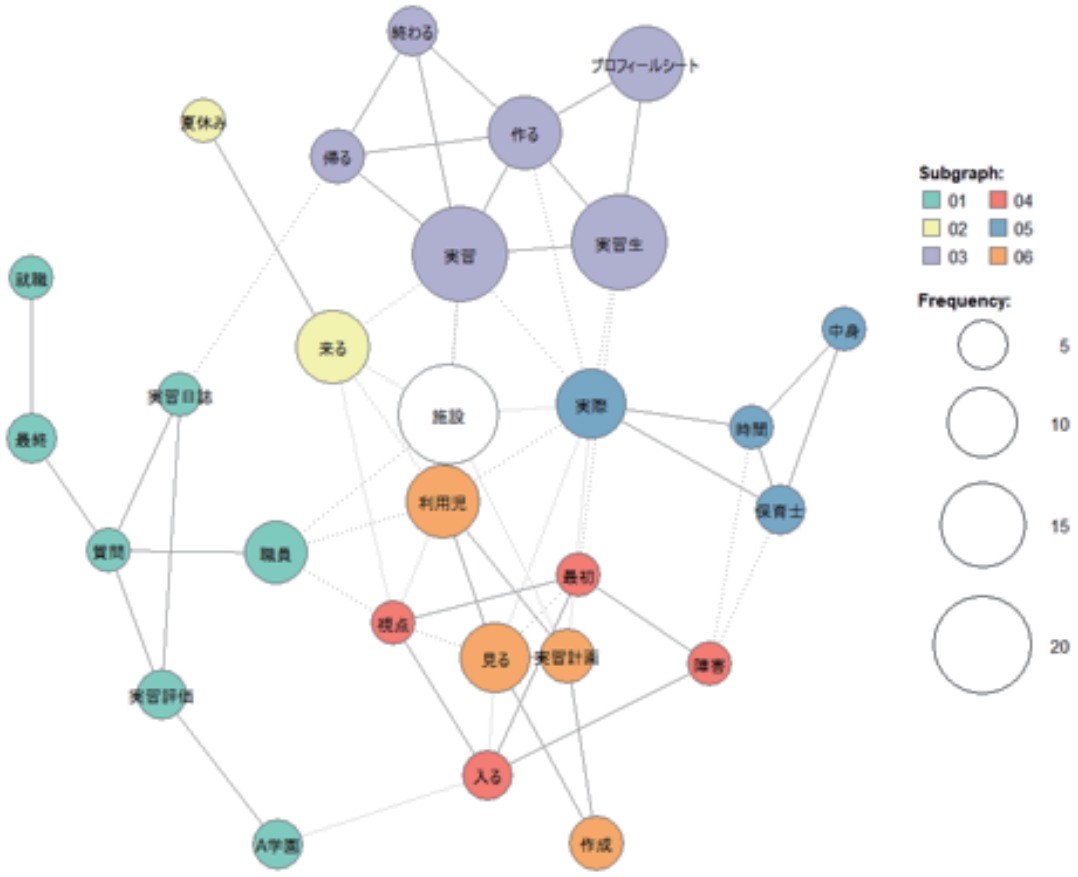

Figure２　施設職員の共起ネットワーク

施設職員の共起ネットワークでは６つのグループが検出された。グループ化された語句とその概念と考えられる定義をTable３にまとめる。Subgraph１は「就職につなげることも踏まえた実習」、Subgraph２は「ボランティア」、Subgraph３は「実習の目標としての成果物」、Subgraph４は「実習初期の実習内容」、Subgraph５は「実習中の指導の実態」、Subgraph６は「利用児を捉える視点を持つための実習計画」と定義した。Subgraph１は「実習日誌」や「実習評価」と実習に関する語句がある一方で「就職」が入っているため「就職につなげることも踏まえた実習」と定義した。Subgraph２は夏休みなど長期休みを利用してボランティアに来る学生についてのグループであるため「ボランティア」とした。Subgraph３について、この職員が勤務している施設では実習中に「プロフィールシート」の作成を課しており、プロフィールシートを実習の成果物とし、「実習の目標と

しての成果物」と定義した。Subgraph４は「最初」や「入る」という語句から「実習初期」のグループであり、「視点」と「障害」という語句から「実習初期の実習内容」と定義した。Subgraph５は「実際」や「中身」という語句から実習の実態に関するグループであると考えられるが、「時間」や「保育士」と言う語句は保育士の忙しさや勤務形態から指導の時間が限られていることを指しているため「実習中の指導の実態」と定義した。最後にSubgraph６は「利用児」、「見る」という語句から実習中の観察対象である利用児を捉える視点と考えられ、「実習計画」の「作成」の目的として「利用児を捉える視点を持つための実習計画」であると判断した。

Table３　グループ化された語句とその概念

グループ	語句	概念の定義
Subgraph1	就職　最終　質問　実習日誌　実習評価　職員　A学園	就職につなげることも踏まえた実習
Subgraph2	夏休み　来る	ボランティア
Subgraph3	実習　帰る　終わる　作る　実習生　プロフィールシート	実習の目標としての成果物
Subgraph4	最初　視点　入る　障害	実習初期の実習内容
Subgraph5	実際　中身　時間　保育士	実習中の指導の実態
Subgraph6	利用児　見る　実習計画　作成	利用児を捉える視点を持つための実習計画

【共起ネットワークの考察】

KH coderによる共起ネットワークから養成校教員と施設職員で実習に関するイメージの齟齬がみられた。養成校教員に関しては「養成校として育てる対象としての学生」と「施設実習で学んでほしい保育士の専門性」の概念から保育実習を成長や学びの場であると捉えているのに対し、施設職員は「就職につなげることも踏まえた実習」や「ボランティア」の概念から、学生が学ぶ場であるだけでなく、その後の就職も見据えて捉えている。これは、現在の保育士不足が関係しているであろう。養成校にとっての実習は養成課程の科目の一つであるため、学生の学びや成長に重点が置かれるが、施設にとっては設置基準を満たすため保育士の人数を確保したいが保育士不足であるため、限られた学生との接点を活かして就職に結びつけたいという願望があると考えられる。

また、養成校教員と施設職員で共通する概念も認められた。養成校教員の「実習の観察の視点」と施設職員の「利用児を捉える視点を持つための実習計画」ではどちらも実習で学生に利用児を観察する際の視点を重視していると言える。保育実習で行く施設では、児童養護施設や障害児支援施設など様々な児童福祉施設で実習を行うが、保育所で行う実習に比べ、一人ひとりの子どもの背景や子どもの人権について深く学んでほしいという想いが養成校教員と施設職員で共通していると考えられる。

養成校教員と施設職員のそれぞれの構成概念の齟齬と共通点から、互いに実習生に学んでほしい内容については同様の概念を持ってはいるものの、実習という機会について養成校教員は学生の成長や学びに重点を置いていることに対して、施設職員は学びだけでなく就職につなげるための接点と捉えていることがわかる。それぞれの立場による捉え方の違いがあるためそれぞれの立場を尊重しつつも学ぶ内容についてより焦点化できる方法の明確化の必要性が示唆されたであろう。

４，SCATによるストーリー・ラインの作成と結果

【分析の手順】

SCATは①データ中の着目すべき語句、②注目すべき語句を言い換えるためのデータ外の語句、③そのデータ外の語句を説明するための語句、④文脈を考慮し、そこから浮き上がるテーマ・構成概念の順にコードを考案する４つのステップのコーディングを行い、考案されたテーマや構成概念を基に

ストーリー・ラインと理論記述する手続きのことである。本研究では、大谷（2008）のSCATの方法を参考にインタビューの話題毎にストーリー・ラインを作成し、段落にわけて養成校教員と施設職員のそれぞれのストーリー・ラインとした。SCATを使用することにより、短い話題でもそこにある課題意識や構成概念を抽出することができ、言葉の頻度に関係なく重要な語句に着目し、語りの意図を明確化できる。また、主観的な記述になりやすいストーリー・ラインの記述も言い換えやテキスト外の語句を探す手順を踏むことにより、分析過程の省察を行い、一定の分析の質を担保できる。ストーリー・ラインの作成にはステップ④の構成概念を主体に作成した。構成概念は〈　〉で記述した。

養成校職員ストーリー・ライン
この養成校実習担当職員は、理想の実習生像として〈保育士としての障害児理解の仕方〉を学び、〈保育士としての内面的資質の成長〉を期待している。また、実習中では〈保育士の専門性を持ったかかわり〉について学んでほしいと期待している。養成校の保育士養成課程では〈施設保育士の魅力を伝える科目〉や〈児童福祉施設の理解を深める科目〉があるため、施設実習で現場と学びをつなげられると考えている。しかし、施設実習にかかわる〈保育士養成課程の科目のバランス〉に懸念を抱いている。また、施設職員の中の〈施設保育士の割合〉についてのわからなさも窺える。 実習中の指導について、〈遠慮による協働的実習の妨げ〉が起きていると感じている。学生には〈職員の指導ですっと入る学び〉があるため、〈施設での遠慮ない指導の期待〉を持っている。実習での指導では、〈現場からの課題の投げかけ〉を巡回指導の時に施設職員から養成校職員に行ってもらい、〈指導内容の共有〉を図ることが望まれる。そのため、施設と養成校の協働には〈遠慮を排除する課題〉がある。 実習での学びについて〈社会での実践力〉を身に付けることも実習の成果としてある。学生は〈実習への期待と楽しみ〉をもって実習に臨んでおり、実習に行くことで〈施設への就職興味〉が高まる学生もいる。施設実習は授業としての目標や自己課題の解決だけでなく、就職を見据えた〈施設保育士の魅力発信とつながり〉がある。 施設からの評価の特徴として一番低い評価が返ってくるときは〈一番下の評価を付ける際の根拠としての消極的態度〉が記載されていることが多い。日誌に関して〈伝統的な日誌への固定概念〉があり、紙媒体での手書きの日誌が主流である。〈ICTを活用した実習〉として実習日誌のパソコンでの記入は〈質の向上〉につながるが、〈日誌の内容と書き方〉については実習生の能力により成果が異なる可能性も示唆される。

施設職員ストーリー・ライン
この施設職員は理想の実習生像として〈実りある実習になるよう目的意識を持った実習生〉をイメージしている。今までの実習を振り返り〈なんとなく行う実習〉に問題意識を持っており、その改善方法として〈学生の主体的な学びを支えるツールとしての成果物〉として利用児理解シートの作成を実習生に課している。この利用児理解シートでは〈利用児への理解力〉と作成するために職員に質問するといった〈意欲的な姿勢〉が求められる。 実習計画について〈業務理解の段階としての観察実習〉として職員の事務所での業務を観察する段階を設けている。 養成校での学生の学びについては〈保育士養成課程のわからなさ〉があり、どのような内容を学生が学んでいるのか不明瞭なところがあるが〈養成校の指導に意見できない雰囲気〉があり、施設からの要望を伝えられずにいる。学生には〈多岐にわたる保育士の活躍の場〉があることを理解してほしいと伴に、保育所意外で活躍するための専門性の学びとして〈子どもを理解する視点を評価するツールとしての利用児理解シート〉の活用するメリットの側面と考えている。

実習施設と養成校との連携について、今までの〈施設に丸投げの実習〉では、指導法が確立していない場面もあり、〈ただの体験になっている実習への反省〉もあり、〈他の施設との違いの不明確さ〉も課題と捉えている。そのため〈養成校が提示する実習計画への期待〉がある。〈実習の質の向上のためのツール〉としての〈学びの言語化による評価〉により〈目標達成の見える化〉を図り、共有できるようにすることで〈ツールによる実習と事後指導のつながり〉を持たせることができる。今までの評価は〈一番下の評価を付けてはいけないという暗黙のルール〉があったが、これにより〈遠慮のない指導の実現〉の可能性が窺える。

実習日誌については〈手書き日誌への疑問〉がある。〈成果物の効率的な作成のツールとしてのICT〉の〈活用方法を模索〉し、〈書類のパソコンと手書きの使い分けの工夫〉を行う必要性を感じている。また、〈パソコンでの日誌作成による実習生の負担軽減〉につながると推測される。

実習の受け入れについては、学生の〈実習に対する戸惑いと不安〉があると推測するが〈充実した実習による施設保育士の魅力発信〉の機会でもあると捉えている。〈なんとなくの実習では就職にもつながらない〉ため、施設としても実習を充実したものにしたいと考えている。また、ボランティアについても〈生徒・学生との接点の増加からの就職〉につながるよう〈将来的な就職を見据えたボランティア〉の受け入れを積極的に行う。

5. まとめ

【本研究からの保育実習の課題の提言】

本研究の結果から、養成校教員と施設職員ではそれぞれの立場から実習を質の高いものにしたいという願いがあることが明確になった。養成校教員は保育実習を通して保育士としての資質や専門性、さらに社会人としての成長を期待しており、施設職員は利用児の理解や理解する視点を持つことができるように期待していることがわかる。しかし、両者の期待には齟齬があり、その方向性の違いが質の高い実習の障壁になっているであろう。互いに質の高い実習にしたいと考えているものの、その内容の共有ができていない現状にはお互いの遠慮があり、それぞれの立場を尊重するあまり、率直な意見を伝えられていないことがわかる。

本研究の結果から、現在の保育実習には以下の課題があると考えられる。

①養成校と施設の実習指導者の実習での学びの共有

KH coderの共起ネットワークで抽出された概念やストーリー・ラインから養成校教員と施設職員はそれぞれ実習で学生に学んでほしいという期待があるものの、実習に対する共通の内容についての概念は見られなかった。これは施設職員のストーリー・ラインにある〈なんとなく行う実習〉というように、今まで養成校は施設に実習をお願いし、実習内容については実習施設が独自に行っていた背景があると考えられる。「指定保育士養成施設の指定及び運営の基準」が2003年に定められ、保育士養成課程の目標や内容の統一が図られてきたが、養成校では周知されても施設での知名度はそこまで周知されていない可能性がある。2018年の「指定保育士養成施設の指定及び運営の基準」の改定を受け、2022年から全国保育士養成協議会が実習指導者認定を行うさらなる実習の質の向上を図っているが、施設の実習担当者と養成校の実習指導者の共通した実習の捉え方を共有することが課題である。

②互いの立場による遠慮を排除するためのツールの確立

今回のストーリー・ラインから、養成校教員と施設職員に遠慮があり、その遠慮が指導内容や指導方法、実習評価に影響していることがわかった。養成校は実習をお願いしている立場であり、施設は就職へとつながる可能性も期待しているため、率直な意見の交換が難しくなっていることがわかる。

養成校と施設で立場の違いがあり、担当の教員や職員も固定されている組織ばかりではないため、人間関係も定期的に構築し直さなければならないため、遠慮自体をなくすことは難しい。しかし、ものをツールとして媒介させることで、遠慮のない指導や評価を行うことができると考えられる。KH coderの結果から養成校教員の「実習生に関する指導の連携」の概念と、施設職員の「実習の目標としての成果物」の概念から養成校教員が指導の連携の必要性を感じている一方、施設職員は成果物を共有することで連携を図ろうとしている。実習日誌も一つの成果物であるが、日々の指導方法や書き方が統一されていないため、養成校と施設で共有する必要がある。また、利用児の理解度を測るために利用児理解シートのように成果物で評価を統一することは、客観的評価を高める可能性があるため有効であろう。しかし、養成校や実習施設は多数存在し、各養成校や各施設で成果物としたいものを作成した場合には、混乱が予想される。そのため、汎用性が高く、保育実習に関わる指導者であればどのような意図でどのように評価すべきか即時に理解できる成果物が必要であり、今後の課題である。

③ICTを活用した実習の質の向上

実習日誌のデジタル化は養成校教員と施設職員の両方に課題意識があることがわかる。実習日誌の扱い方や書き方も養成校ごとに決まっているため、様々なフォーマットが存在するが、手書きでの記入の養成校は多い。しかし、施設でも支援計画などはパソコンを使用して作成したり、保育所でも園便りをパソコンで作成したりするなどパソコンでの書類作成が徐々に浸透しつつある。そのため、実習日誌や他の書類作成もパソコンを使用できないかという考えが出始めている。実習日誌に関しては、施設内の様々な情報が含まれているため、今までの保育者養成でも守秘義務や情報漏洩防止の観点から特に扱いには注意を払うように指導がなされていた。また、すべての学生がパソコンを持っているわけではないことやそのデータをプリントアウトするのか、メールで送信するのかなど提出方法も手探りであるためパソコンを使用した実習日誌の記入はあまり進んでいない。

さらに、ICTを活用した実習という観点ではただパソコンを使用するということでなく、例えば学生が作成した日誌や成果物を即時に施設職員と養成校教員が共有できるシステムや巡回指導や中間反省会をオンラインで行うことで、実習中の学生と養成校教員の接点を今まで以上に持つことができるなどまだまだ可能性を秘めているであろう。

【本研究の課題について】

本研究では、実習にかかわる養成校教員と施設職員それぞれ１名の会話から実習の課題について分析を行った。まず、研究対象がそれぞれ１名であるため、今回の結果の一般化可能性については限界がある。しかし、どちらも実習指導にかかわる立場として感じている現場からの意見であり、その課題意識を明確にしたことに本研究の意義があると考える。また、保育実習を行う施設については乳児院や母子生活支援施設など大きく９種類の児童福祉施設で行うこととされており、１施設の施設職員が対象であるため、そのすべて児童福祉施設での実習にあてはまるとは言えない。次にKH coderとSCATという２種類の分析方法からテキスト分析を行ったことで質的研究の客観性を高めたが、語句の選出には課題がある。

【今後の展望】

保育の質を底上げしていく中で、保育者養成の質の向上は重要である。保育者養成課程の中でも実習は既習の知識を現場とつなげ、また実際に保育を観察・実践する機会であり中核を担う科目であることは言うまでもない。本研究は保育実習の施設実習に関する課題を抽出することを目的とした基礎研究であり、課題を明確化したことに意義がある。しかし、課題を解決するための方法まで言及するものではなく、今後は今回の課題を解決するための実践研究が必要となる。実習評価としての成果物としてはすでにある実習日誌や実習評価以外の必要性についても検討が必要であり、実習の目標を可視化できるものであることが望まれるであろう。また、遠慮を排除するためのツールの作成には養成

校と施設それぞれの視点からどういったものか明確になるよう作成のプロセス自体にも協働が必要であることが予想される。さらにICT活用についても実習日誌のデジタル化や実習内容でのICT活用と幅が広いため、焦点化して進める必要があるであろう。これらの課題を考慮したうえで今後の実践研究へとつなげたい。

参考文献

金仙玉.（2019）. 保育士養成校における「施設実習」指導の在り方検討―改正児童福祉法を通して―. 瀬木学園紀要,（14）, 32-36.

大谷尚.（2008）. 4 ステップコーディングによる質的データ分析手法 SCAT の提案―着手しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続き―. 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要. 教育科学, 54（２）, 27-44.

大谷尚.（2011）. SCAT: Steps for Coding and Theorization. 感性工学, 10, 155-160.

藤原一子.（2020）. 保育士・教員養成課程に在籍する学生のピアノ学習における躓きの検討-KH Coder と SCAT を活用した分析.東海学園大学教育研究紀要.4,59-67